

「11 月の雪を探究する (6)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

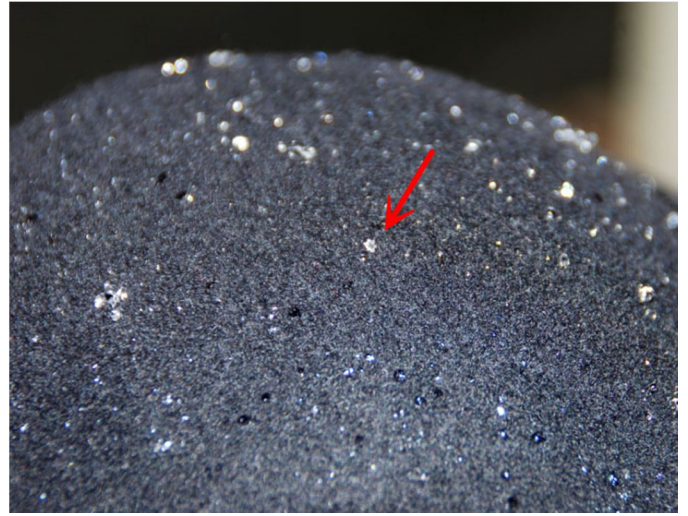
布は、紙よりも更に雪の結晶に熱を伝えにくい。紙の上に雪粒を受けようとしているうちに、標準服(制服)やカーディガンの上に、自然に落ちた雪粒を、互いに観察し合う姿が多く見られた。



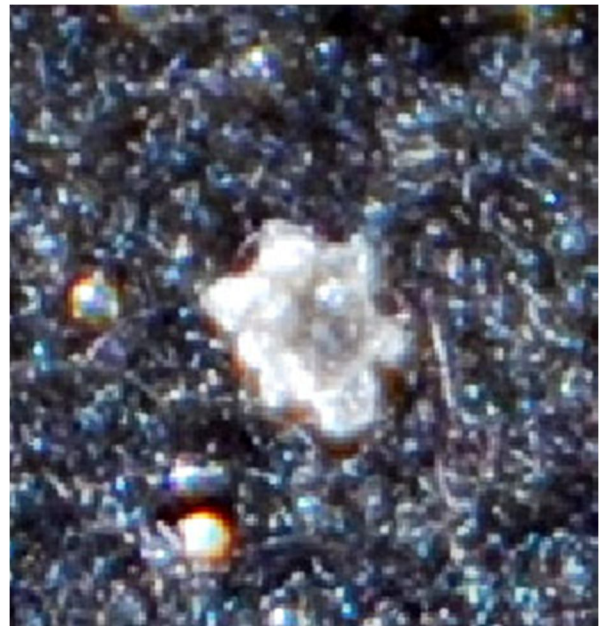
標準服よりも、更に観察に適していたのが、女児の冬制帽である。冬制帽は、濃い紺色のフェルトで作られている。一見表面は滑らかに見えるが、拡大すると、凹凸が多く、熱を伝えにくいようだ。男児の制帽もかなり良い成績をあげていた。



このことは、今後の「雪の結晶活動」の大きなヒントになった。画用紙の場合、融けた雪は表面で「水たまり」のようになってしまい、次に落ちた結晶も融かしてしまう。フェルトの場合は、徐々に水が浸み込むので、連続して観察できることもわかった。



写真は、女児制帽の上に落ちた、六花(ろっか)の結晶である。大きさは 0.5mm 程度しかないが、さすがに子どもたちは目がいい。「せんせえーいーい！すっごいきれいな結晶があった！早く早くっ！」私は駆けつけて、大急ぎでピントを合わせて撮影した。



これがその拡大写真である。すでに融け始めていて、形状は不完全だが、確かに 6 本の腕を持っている。まさしく雪の結晶である。この結晶は、帽子に落ちてから 20 秒も消えず、驚異的な長時間の観察ができた。

市販のフェルト生地には、折り紙大のもの裏に、粘着テープ付きのものがある。それを小さなベニア板に貼って貸し出せば、すばらしい「雪の結晶観察板」になるだろう。次の雪までには用意しておきたい。